静岡県博物館協会会報
No. 76

静岡の博物館

リニューアル・オープンする富士市立博物館（愛称：富士山かぐや姫ミュージアム）

静岡県博物館協会

平成27年度　第１回講習会
作 品 取 扱 い 講 習

日　時：平成27年10月27日（火）　13：30〜16：30

会　場：静岡県立美術館　講座室

内　容：１．担当スタッフ紹介

２．仏像輸送について（梱包材料紹介）

３．唐招提寺　盧舎那仏の輸送（映像）

４．美術品の取扱いの基本説明

５．梱包資材の作成実習（綿布団・紐）

６．陶器作品の梱包実習

７．桐箱の取扱い・紐の掛け方

８-Ａ．埴輪の梱包デモ

８-Ｂ．掛軸の取扱実習

９．ダンボール箱の作成デモ

10．質疑応答

協　力：日本通運

参加者：21名

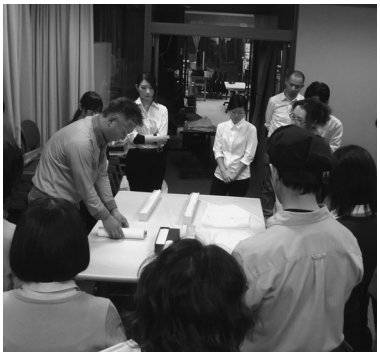
学芸員にとって作品の取扱いは基本のスキルとして身に付けておくべきものであるが、昨今、サブカルチャーなど展示作品の多様化や、団塊世代の大量退職等で若い世代の技術取得が困難になってきているなど、取扱い技術のスキルアップの場の必要性が高まっている。静岡県博物館協会としては、そうした要望に応え、昨年度、作品取扱講習を第2回講習会として実施した。予想を上回る参加者があり、継続開催を望む声も多かったため、本年度も作品取扱講習を実施することとした。

本年は、日本通運株式会社に協力を依頼し、昨年度に引き続き掛軸や陶器取扱い実習のほか、要望の多かった紐の結び方、巻子の取扱い等を実施した。冒頭の挨拶および梱包資材の紹介、美術品輸送の実際についての映像を見た後、６〜７名ごとのグループをつくり、綿布団や薄葉紙で紐をつくるところから実習が始まった。作成した布団や紐はそのまま陶器の梱包実習に用い、内装梱包から共箱に収め、紐をかけるところまで各自実習した。各作業中、日本通運の青木氏、豊泉氏、鈴木氏がこまめにグループを回り各人に指導を行ったほか、参加者からも積極的に質問をする姿も目立った。

休憩の後は埴輪の梱包のデモンストレーション見学と、掛軸の取扱い実習をする２グループに分かれて実習を行った。埴輪の梱包については、紐が埴輪の筋模様に当たらないよう注意を払う、突起が多く、また折れやすいため少し硬い綿布団を用いるなど、考古資料ならではの注意点を学習することができた。掛軸は昨年度に引き続いての実習ではあったが、参加者の半数以上が参加し、豊泉氏から指導を受けながら、各自手順を確かめ慎重に作業を行っていた。段ボール箱の作成は時間の関係でデモンストレーションとなってしまったが、日々の業務にも役立てられる技術であり、非常に参考になった。

今回の参加者は昨年度よりも少なかったが、若い世代の参加が多く、皆熱心に作業に取り組んでいた。次年度以降も継続を望む声が多く、掛軸や陶器など扱う頻度の多いものについては引き続き実習に取り入れ、また幅広い層の参加のために衣服や工芸品、考古資料など回ごとに様々な資料の取扱いもできるような講習が実施できれば良いと思われる。

（事業推進グループ・静岡市美術館　小川かい）



平成27年度　第２回講習会
博物館園におけるデジタル画像の取り扱い方

日　時：平成28年１月22日（金）　13：30〜16：10
会　場：沼津市明治史料館　２階講座室
講　師：遠山元浩氏（遊行寺宝物館館長）
参加者：34名

作品や資料のデジタルカメラ撮影及び画像編集は、美術館・博物館の業務において現在、日常的に行われている。だが、再撮影ができず質の悪いデジタル画像を使わざるをえなかった、印刷物の色が思い通りにならなかった、といった失敗に悩まされる事も少なくない。

本講習会の講師を務めた遊行寺宝物館館長の遠山元浩氏は、国宝《一遍聖絵》の極めて優れた複製を自ら作成し、その技術を後進に伝えている学芸員である。講習会前半は、作品調査１度きりの撮影で、研究から印刷の使用までを包括したデジタル画像を得ることを目標とした、撮影、編集、印刷までの流れの説明。後半は、遠山氏の機材を使用しての撮影実演、高精細画像で制作した一遍聖絵複製の見学を行った。

自館のデジタルカメラの能力を知り、そして画像の用途をあらかじめ想定すれば、必要なデータサイズがわかり、求める結果につながる。まずは撮影のための、カメラの基本操作と画素や解像度の解説があった。

畳の部屋で撮影をする場合、三脚を使っていても人が動くとブレが起きやすいので、レリーズやタイマーの使用が良い、複数メディアに画像を保存しデータが消えた場合に備える、など調査撮影場所が個人宅や他館のケースも多いからこその事例を交えた、失敗を最小限に抑えるためのアドバイスも示された。

撮影から編集までの間、可能な限りのカラーマネージメントを行うことが、良好な色再現の重要なポイントである。撮影、パソコン用ディスプレイ、画像編集時の室内、それらすべての光源の色温度を5000K（昼白色）に合わせることが理想で、どうすれば環境を整えられるか具体的な説明があった。カラーマネージメントがしっかりできていれば、色校正が無くても望みの色に印刷物を仕上げることができる。

一遍聖絵複製のような高品質の複製を制作することは、文化財保護につながると遠山氏は語る。複製の活用により、原本に直接触れず研究できたり、将来の修復の指針として役立てたりと様々な可能性が今後も見出されていくだろう。

デジタル画像が普及する一方、管理の難しさも無視できない。特に、商業ベースの媒体へのデジタル画像の貸し出しは、無尽蔵に複製されるなど、権利を無視した扱いを容易に受けるので慎重になるべき。遊行寺宝物館は原則紙焼きとポジフィルムで画像貸し出しの対応をしているそうだ。

遠山氏の講演内容は基礎から専門的な内容まで多岐に及び、デジタルカメラの設定、パソコン用ディスプレイの色温度変更といったすぐに実行できることも多く盛り込まれていた。

デジタル画像を使用した印刷物、とりわけ図録等の書籍は後世に伝える大切な資料。高画質で色再現の良いデジタル画像を残す努力は、私たちの責務だということを改めて認識した。

（事業推進グループ・公益財団法人佐野美術館　深沢香奈）

平成27年度　第３回講習会
災害時の緊急対策について　～資料・什器等の破損時の対応方法を中心に～

日　時：平成27年３月４日（金）　13：30～16：15

会　場：浜松市美術館講座室

内　容：講座「展示ケースおよび展示環境のリスク管理について」

講師：山内佳弘氏（コクヨ株式会社）

「関連団体・業者により応急処置デモ、情報提供」

講師および協力：NPO 文化財を守る会、株式会社資料保存器材、タキヤ株式会社、光明理化学工業株式会社

参加者：18名

近年、建物の経年劣化に由来する不具合や、周囲の環境悪化等によって、資料が悪影響を受けることが起きている。これら、日常的に生じかねない危機への対応は、大規模な自然災害への備えと同様、あるいはそれ以上に、博物館活動にとって重要なものだと思われる。

今回の講習会では、上記のような現状を受け、過日行なったアンケート結果を反映し、日常的な危機の中でも懸念の多かった、資料の水損や、展示や収蔵環境への対応について学ぶ場とした。また、関連団体、業者にも協力いただき、什器の補修や、資料の緊急処置などについて情報を得ると共に、普段なかなか言い出しにくい事項について、館園同士での情報共有を図る機会となることも目的として開催した。

講習会では、初めにコクヨ株式会社のチーフエンジニアである山内佳弘氏より、「展示ケースおよび展示環境のリスク管理について」と題して講演をいただいた。講演では、兵庫県南部地震（1995年）、新潟県中越地震（2004年）、東北地方太平洋沖地震（2011年）などの過去の震災における展示ケースの被害状況について、具体例を交えてお話しいただいた後、展示ケース・収蔵庫の震災への備えについて、展示ケースの安全性の確認方法、免震装置のパターン、収蔵棚の落下防止策等につき、様々な事例をご紹介いただいた。最後に展示ケースのリスク対策として、空気環境や温湿度環境の確認、クロス貼り替えの際の留意事項等のリスク対策方法について、具体的にお話しをいただいた。本講演を通じて、災害時のリスク管理については、正しい知識の習得とそれに基づく事前の対応策が重要であることを再認識した。

後半の関連団体・業者による応急処置では、それぞれのブースを設置し、参加者の関心に基づき自由に見学出来るようにした。「NPO 文化財を守る会」のブースでは、水損した文書の修復方法について、デモンストレーションを実施いただいた。「株式会社資料保存器材」のブースでは、保存ケースの様々なタイプや古文書などの清掃方法についての装置をご紹介いただいた。また、「タキヤ株式会社」のブースでは、免震機能つきの什器や温湿度管理のための測定器のご紹介をいただいた。「光明理化学工業株式会社」のブースでは、展示場内の環境測定器（温湿度、気流、ガス）につきご紹介をいただいた。

今回の講習会は、前半の講座と後半のデモンストレーションを通じて、災害時の緊急対策に必要な具体的な対策を習得出来、今後の各館の災害対策を考えるための良い機会となった。

（事業推進グループ・資生堂アートハウス　丸毛敏行）